ヒイロノウタ

金糸雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒイロノウタ

【Ｎコード】
Ｎ７８１４Ｐ

【作者名】
金糸雀

【あらすじ】
ラスティール王立学院は、王国の将来を担う若者達が多く集い学んでいる。そこの魔術科にリコリスという名の一人の少女が入学した。彼女は自他ともに認める落ちこぼれ。でも彼女はへこたれないというか、気になってないというか。のんびりマイペースに能天気そうに日々を過ごしています。おかげで白いのは頭が痛いです。胃に穴が空きそうです。でも彼女の傍から離れたことは無いのです。
・・・離れることもないのです。　そんな彼女とその周りの人々の詩（ウタ）。　※見切り発車。長編ファンタジーで、年の差恋愛要素

が入ると信じたいです。シリアス要素アリ。流血シーン有。全くダメな方はまわれ右をして下さい。基本ギャグ要素もてんこもりの予定ですが。

プロローグ

・・・気付いた時には、何もかもが手遅れだった。

その場に立っているのは、ちいさくてまっかな影、だけだった。ソレはひたすらあかかった。

その髪も、瞳も、腕も、胸も・・・足元も。紅く、赫く、緋い、モノだった。

ソレは、ふと、手元を見た。その時ソレはようやく自身の腕があかいことに気が付いた。そして次に、足元に視線を落とすと、人形が落ちている事に気が付いた。素人の手作りなのだろう、少々不細工なその人形は、大切に扱われていたらしく、手垢でずいぶん黄ばんではいたが、小奇麗だった。

じわじわと「あか」に侵されていることを除けば。

そして、ソレは笑った。空を仰いで、大きな笑い声を上げながら。大きく大きく、高く高く、空に響かせるように。ソレと同じようにあかい、腐り落ちる果実のように暮れてゆく陽に届くように。心底おかしそうにわらった。ワラッタ。笑った。嗤った。哂った。

その「モノ」を知るものは、ソレ自身と、ソレを見ていた2人の子供と、一人の奇妙なおとこと、一匹の獣だった。

・・・そして、子供は誓いを立てた。

１－１　彼女にしてみれば至極平凡な一日

「リコリス・スカーレット。お前が今、ここにいる理由を理解しているか？」

そこに2人の人物が向かい合って座っていた。一人は十代の半ば程の年の頃の少女。若々しい牝馬のような、赤みがかった茶髪をゆるく編んで背中の中ほどまで垂らし、なかなか整った顔立ちをしているようだ。ここで断定が出来ないのは、無骨で無駄に大きい黒ぶち眼鏡が彼女の顔の上半分を覆っているからだ。しかし、眼鏡のレンズの向こうからでも、その髪よりもやや赤みがかっている瞳が澄んでおり、しなやかであると同時に力強い意思の光を宿していることが分かる。

その少女と向かい合って座っているのは３０代半ばの男だった。沈痛な面持ちで少女を見つめていた。その顔は、何度も絶望に打ちひしがれ、疲労の色がはっきりと見えていた。しかし、それでもまだ男は諦めていなかった。

その男は、歴戦の戦士だった。仕事に対する真摯で熱心なその姿勢で後進からは尊敬を、先達からは厚い信頼を集めていた。その熱意からくる言動で一部の合理主義者から反感を買うこともあったが、彼にはそういう反感を受け入れる度量と、経験と知識に基づき、自分の信念を貫く強い意志があった。

少女は彼の覚悟を感じ取り、厳かに答えた。

「勿論です」

「・・・よし。言ってみろ」

少女は軽く息を吸い、一拍置いてその瞳にぐっと力を込めて、改めて男の瞳をしっかり見つめなおして言った。

「つまり、先生は私に先程行っていた実験の失敗理由を述べろと言いたいのでしょう？失敗の原因はわかってます。ここの手順１３のところで加熱時間が１０分ほど長すぎたんです。任せて下さい。次こそは成功させて見せます！！」

少女は実験の操作手順が書かれた紙を突き出して自信満々だった。その様子に男は再び絶望に打ちのめされながらも声を絞り出した。

「…ああ俺はお前の技能の評価を上方修正しなければならないようだ」

「本当ですか！？やった！じゃあじゃあ、『色つき』になれますか？」

彼は、とうとう堪え切れなくなって声を荒げ、教員室の人間全てどころか、廊下や中庭にまで聞こえるような大音声で悲壮な叫びを上げた。

「こんの、馬鹿が！！！今のは皮肉だ！！！誰がただでさえ、実技の成績がぶっちぎりの最下位で、たった今！実験室を黒こげにした阿呆が、学院が誇る成績優秀者に与えられる『色』を、お前なんぞつけるかああ！！！お・れ・が！言ってるのは！そんの問題を起こすいっそ見事なまでのその手腕だああ！！ばかのばかのばかの中のばかとは思っていたが！ここまで馬鹿だとは思ってなかったぞ！！！」

「いやあ・・・。それほどでも」

「全っっったく！これっっっぽっちも褒めて無い！！！照れながら嬉しそうに笑うなああ！！！」
「血圧上がりますよ～？」

ここまで怒鳴り散らしても少女は全く堪えていなかった。
「はあああ・・・」
「先生、午後一番の授業は移動教室で、昼食をまだ食べて無いんで帰っていいですか？」

その全く懲りて無い飄々とした態度に、彼はもうリアクションを返す気力も無く、ひらひらと片手を振ることで了承の意思表示をした。

「じゃあ、失礼しました～！」

元気よく、しかし礼儀だたしく腰を折ってからリコリスは教員室を退室していった。

本日もこのリコリスの能天気さに教育者として完全敗北を喫した教育戦士ラグン・ベルナルは現実に打ちのめされながらも昼休みが終わるころにはまた再戦を決意した。

これは、リコリスが入学してからというものすっかり定着してしまった、ラスティール学院教員室のとある昼下がりの風景だった。

１－１　彼女にしてみれば至極平凡な一日（後書き）

２話の途中まではブログにＵＰしているのでそれまでは毎日更新しますが、それからは亀更新になります。一か月に一度更新できるかできないかくらいになると思います・・・。そして、ブログで先にＵＰして、それから少し間をおいて冷静になってからこちらに微妙に修正したものをＵＰしていくようになると思います。

1―2

「こりねえなあ！リコリス！」

教員室から小走りで廊下を進んでいたリコリスに、茶髪の少年が親しげに声をかけた。

「あ、ジャン」

「今度はどうやって先公泣かしたんだ？」

「別に泣かしてないよ。ちょっと実験に失敗して、派手に小さな爆発が起こっただけ。煙も出たから涙目にはなってたけど」

派手な爆発が小さいって言えるわけ無いだろう、とラグン教師が聞いたら涙目になりそうなことを真面目な顔をして言うリコリスを見て、ジャンと呼ばれた少年は、茶目っ気たっぷりに腕を組んだ。そして、海千山千の老学者をイメージしてしかめつらしく顔をしかめながら言った。

「ふーむ。なるほど。それはそれは、とーーーーっても小さな爆発が起こったわけですな。別棟に居た俺の耳に盛大な爆発音が聞こえるくらいの小さーーーーな爆発が」

「うん。そうよ」

リコリスはあっさりとうなずいた。ジャンはそこでしかめっ面を止めてにやりと笑った。

「いやあ、本当に、お前って図太いよな。素晴らしい才能だ。実技の実力も含めて。まあ、それは置いといて」

「自分から話を振ったよね？」

「まあまあ。で、さっき日課変更があって、午後一番の授業が歴史に変わったぞ」
「えー」
彼女にしては珍しく、げんなりした顔をするリコリスを見てジャンはいっそう面白そうににやにやと笑った。
「だから急げよ～。俺は、変更前の教室にもう移動してる気の早い奴らに教えに行くから」
「まだお昼ごはん食べて無いのに～」
「絶対失敗するって分かってるのに、昼休みなんかに実験なんてするからさ。だいだいかわいそうなのはラグン先生の方だろ。折角の貴重なお昼休みをどっかのいっそわざとであってくれって感じのどじっこの説教でつぶれたんだから」
「う～～」
「まあ、お前ならさっさと食えば間に合うだろ、じゃあな！」
最後は軽くリコリスにフォローを入れて、ジャンは走り去って行った。
「あーあ。ごはん食べる時間が増えたのはいいけど、午後のはじめが歴史かあ・・・。憂鬱だなー。ねえ？ルナ」
ジャンの後ろ姿を見送っていたリコリスの足元にはどこから出てきたのか、いつの間にか黒猫が擦りよって来ていた。
「ま、がんばろっか」
ルナと呼ばれた黒猫に宣言するようにそう言って、リコリスは食堂に向かってまた走り出した。

1―3

リコリスは、ジャンと別れた後走って到着した食堂で日替わりランチセットを5人前あっという間に平らげて、その後さらにデザートを１０人前を平らげて、さらに食堂のおばちゃんにサービスしてもらったりんごを授業の直前まで幸せそうにかじっていた。

「ほほろと、ふぁん。ふーひははっら？」
「口にもの入れながら喋るなよ・・・。お前、ほんとに女か？」
「んっくん。それは女性差別だよ。モテなくなるよ？」
「うっせえ！・・・ちなみにさっきの質問だが、見かけてねえぜ」

ジャンは行儀悪く口に林檎を頬張ったままのリコリスの質問の意味を正確にくみ取りながら掛け合いをしていたところで丁度始業チャイムが鳴り、歴史学の教師が入って来た。
「おおー今日も時間ピッタリに来たね～。うん。すごい」
「お前にはできない繊細な芸当だな」
歴史学の教師は歴史一筋５０年のベテランで、頑固ジジイと名高い厳しい人物だった。この教師の授業で私語したり、軽はずみなことをするような生徒は『基本的に』いなかった。

そして、日直の号令がかかり授業が始まった。
「まず、今日の授業に入る前に前回のまとめを・・・」
と、教師が言い始めたところで、廊下から慌ただしい派手な音を立てながら駆けてくる足音に続きを遮られた。

教師はまたか、という台詞を眉間の皺で代弁させながら厳しい叱責の声を上げた。年季の入った、厳つい顔つきと相まって、普段た

だ喋っているだけでも怒っているように聞こえる威圧感のある声だった。
「遅いぞ！ミュー・ミルディ！」
「す、すいません！変更を知らなかったので！」
名を呼ばれた派手な足音の主は恐縮して頭を下げながら遅刻の理由をたどたどしく言った。

「変更は伝えさせたはずだ！」
「ちょ、ちょうど入れ違いになったみたいで・・・」
「言い訳はいい！さっさと席に着け！」
「は、はい！・・・きゃっ」
そして、少女は盛大にずっこけた。それはもう見事に頭から。教師のの手前、おおっぴらに笑う生徒はいないがくすくすという忍び笑いと教室に響いた。
「嫌よね、これだから『ケダモノ』は」
そして、小声だがそんな声が少女の、猫のような耳にまでよく通った。

「ミュー、教科書は無事？」
そして、リコリスはのんびりと待ち人に声を掛けた。
「う、うん。自分のだからちょっとくらい折れても大丈夫だけど・・・ほら！全然折れて無いよ！」
「うんうん。入学時に比べたら大分受け身が上手くなったよね～。えらい」
「えっと・・・。えへへ」
「ばかっ！何のんきに笑ってんだよ！さっさと席に付け！」
のほほんと談笑していた2人にジャンが適切な警告を送るがそれは遅かった。
「いつまで床に座っているつもりだ！そこで私の授業を受けるつも

りか！」
さらに怒気を増した教師の叱責が飛んだ。
「す、すみません！」
「失礼しました」
ミューは恐縮しながら、リコリスはマイペースに返事をした。

「で、どうしたの？ジャンが行ったはずだけど」
「え、えっと・・・。向こうに早めに行って待ってたんだけど、ちょっと席はずしてる間にジャン君が来たみたいで・・・」
「そこ！私語は慎め！」
「はい」
「す、すみません」
リコリスと、リコリスが懲りずに話しかけてした質問に律儀に答えたミューに再び雷が落ちたが、リコリスの方は聞いているのかいないのか、堪えた風には全く見えなかった。教室にも、ああまたこいつかこりねえな、という雰囲気が濃厚に漂いだした。

「あー。では、今日の授業に入る前に前回のまとめを・・・」
毎度変わらないリコリスの飄々とした様子に、今日もどっと疲れを感じながら、歴史を語って５０年の老教師はやっと本日の授業を始めた。

1―4

「はい。ということで、放課後です。今日は授業が早く終わって、一般的な学生ならこの時間を有効に使って遊び倒すところですね」

ジャンは右手の拳を軽く握って口元で構え、マイクを持ったリポーターのように、しかしリポーターとしては落第なのっぺりした平坦な声で言った。

「だよね～。私も今日は街で食い倒れる予定だったんだ」

「私は、時間があるときにゆっくり読もうと思って取っておいた本を読もうと思ってたな」

「何の本？」

「えーっとね、『魔草の取り扱い事典』っていうの。魔草に関する事故事例がたくさん載ってて面白いの！ただ、ちょっと載ってる魔草の種類がちょっと少ないんだけどね」

「あー、あれ？この前薬学の先生から借りてきた、分厚過ぎて片手じゃ持てなくて、しかも全１０巻あった」

「うん。その本だよ」

そのジャンの台詞に答え、しかしそのジャンをそっちのけでリコリスとミューはほのぼのと雑談を交わした。年頃の女学生が仲良くほのぼのしている光景は大変なごむが、今のジャンには逆効果だった。胡乱な眼で２人を見ながら声を絞り出した。

「化け物だ・・・ここに、青春を、そんな開く前に寝てしまいそうな本の読書時間で浪費する化け物が・・・。って！そうじゃねえ！俺が言いたいのは！何で俺が薬草学の授業中爆睡してたお前のとばっちりを受けて飼育棟の罰掃除を手伝わなけりゃならねえんだ！」

３人が居るのは、学園内の魔法生物飼育棟の一室。本日最後の授業で寝ていたので罰掃除を言いつけられたリコリスに巻き込まれたジャンは、勢いよく一人でノリツッコミしつつ抗議の叫びを上げた。

「んー。・・・頑張れ☆」

「んなウインク付きのぶりっこ的な仕草なんかでごまかせるか！」

腰の入ったスイングで箒をびしっとリコリスの方に向けながらジャンは叫んだが、当のリコリスはあらこんなところにほこりがとか呟きつつ明後日の方向に体ごと向いている。ミューは、そんなジャンを慰めようと口を開いた。

「でも、授業用以外の魔法生物も見れるから、お得だと思うんだけど・・・」

その言葉自体は正しく、掃除を言いつけられた部屋は複数あったが、その中には授業ではお目にかかる事がない魔法生物も飼育されており、今３人が居る部屋は体の一部が魔術の触媒になるような生物が多く居た。しかし、ジャンはそんな実技以外に興味を持つような真面目な学生でも、モンスターマニアでもない。

「そんな真面目な奴はミルディぐらいしかいないって。授業なんて、魔術の実技ぐらいしかやる気でねえよ・・・」

箒に体重を預けてぐってりしてるジャンに向かって、今度はリコリスが口を開いた。

「そう？私、歴史とか聞いてて面白いんだけど」

「どこがだよ・・・」

「だって、自分が今まで聞いた話と違ってるのが面白いから」

「今まで聞いた話？」

「うん。まあ、私の『家』はいろんなモノが集まってたから」

「そろそろ真面目にしないと、暗くなるまでに帰れないよ」

すっかり雑談に気をとられ、最初に我に返って、3人とも手が止まっていることに気付いたのはミューだった。
「じゃ、そろそろ頑張ろうか！」
「くっそー。早く終わらせて、絶対に買い出しに行ってやる・・・」
「あははー。どうせ碌なモノじゃないのにねー、ミュー」
「だ・か・ら！お前が言うなよ！！！」

そして各々それぞれのテンションで、ようやく作業に取り掛かり始めた。

1―5

真面目にやれば早いもので、3人とも無言で黙々と作業をしていると、ほとんど終わりかけたとき、リコリスがふっと顔を上げ、作業の手を止めて窓の外を見た。その視線の先には、白衣を着た人間が数人、どこか慌てた様子で走り去って行っていた。

「おい！主犯が手ェ止めんな！」
「どうかしたの？リィちゃん？」
「あー・・・」
2人の声にすぐには答えず、リコリスはあちゃー、という感じで片手を額に当てながら声を出した。

「どうした？リコリス」
「えー・・・っと。何か、ちょっと、鍵を閉め忘れたような気がしてきちゃった・・・」
「はあ？マジかよ、どこだ？」
「えっと、一階の部屋。ちょっと確認してくるね」
「んなの後でいいだろ。まずこの一番ひどい部屋をなんとかすんのが先だろ！？」
「ホントに閉め忘れてて、中の子が逃げだしたらその方がもっと大変でしょ？」
「そうだね。私、捕まえられそうにないや・・・。いってらっしゃい、リィちゃん」

ミューのもっともな言葉にうっと言葉を詰まらせ、ごまかすようにジャンはしぶしぶという調子を前面に出してリコリスに発破をかけた。
「すぐに帰って来いよ！サボったら承知しねえぞ！」

「ジャンと違って、私はミューに仕事押し付けたりしないよ？」
「さっさと行け！」
ズビシッっとドアを指さしながら言うジャンのその言葉に、リコリスは素直に従って、小走りで部屋を出た。

１―５（後書き）

コピペする場所を何回も間違えて投稿し直しまくってしまいました。
間違えた方を読んだ方すみませんでした（＊―　―）

１－６（前書き）

投稿し直す前の５話を読んだ方はすいません。ひとつ話を飛ばしていまいました。もう一度１－５を読み直して下さい。ｍ（＿＿；）ｍ

1―6

飼育棟は飼育の難度、授業に利用する学年、羽や爪などの魔術に使う媒体などの消耗する備品の採集用、等の基準でいくつかの部屋に分かれている。今まで作業していたのは備品の採集用に飼育している生物が居る部屋で、2階の割と奥の方の部屋だった。

リコリスは小走りで1階へ続く階段を降りようとしたが、そこで階段の手前にあった窓の外から声が掛かってきた。

「罰掃除はもういいのか？」

リコリスはその声を聞いて足を止め、嬉しそうに言葉を返した。

「あ。クーちゃん」

「クーちゃん言うなっつてんだろうが！俺にはちゃんとクラウドという立派な名前が」

「はいはい。で？クーちゃんこそどうしたの？何かあった？」

「人の話は最後まで聞け！」

「何かあったの？」

「・・・別に。お前があの2人に罰掃除を押し付けるなんて珍しいと思っただけだ」

リコリスのマイペースっぷりにざっくりと勢いを削がれたクラウドという声の主は、はああと年季の入ったため息を吐いてリコリスの言葉にそっけなく応えた。

それを聞いてリコリスは、一人で勝手に納得した声を出した。

「やっぱり。クーちゃんも何か見かけたんだ」

「何の話だ？」

「何か見かけたから私の様子を見にきたんでしょ？そうじゃなかったら、クーちゃんがわざわざ来たりしないよね？」

「だから、何のことだ？」

「そっか。じゃあ、私は気になる事があるからちょっと外に出てくるから」

そう言ってリコリスはスタスタと歩き出した。

「・・・ああもう、わかったわかった！！言えばいいんだろ！！！・・・さっきから何かが逃げ出したらしくて、研究員らしい奴らが走り回ってる」

頭を抱えているような声でリコリスは振り返った。クラウドは続ける。

「で、その捕獲用の装備が、ただの研究用の飼育動物が逃げたにしては地味に立派だ」

「それは地味なの立派なの？」

網は元々地味だよね、というニュアンスを含めて問い返した。地味な立派な網。何かのクイズのようだ。網に地味な立派を目指すマニア。・・・普通の変態より近寄り難い気がする。

「見た目は普通の網だが、さりげなくオルハリコンが織り込まれてやがった。っていうか、アレは聖騎士団の装備の流出品臭かった」

その言葉を聞いたリコリスは、いつもの笑みを浮かべていたが、クラウドは思わず軽く背筋を伸ばした。

「へーえ？」

「魔方陣のクセとかが似てたし、網の重しに何かを削ったような跡があった。紋章を消した様に見えた」

「・・・確かなの？」

「俺が見間違えるとでも？」

その問いかけは疑問形ではあったがただの確認だった。それはクラウドも分かっていたようで、特に気分を害すわけでもなく、ふふんと得意げに鼻を鳴らしながら言葉を返し、話を続けた。

「王立だから、院は王室直属の研究所とも提携してるし、騎士団のお古を持っててもありえなくはないが・・・」
「あの聖騎士サマ方が、王族から賜った品をお子様のお勉強用の為に上げたりするかな？」
「・・・」
「ありえないよねー」

リコリスはくすくすと、まるでとっておきの悪戯を思いついたように、それはもうにこやかに笑った。クラウドからは、リコリスの目は見えない。けれど、さっきから感じていた不幸の予感がさらに強くなった気がした。

「で、そんな貴重品使って捕まえようとしてるのは十中八九、戦闘能力の高いモノだよねー・・・」
「特殊な精神系の魔物とかって可能性もあるだろうが」
「もちろんその可能性もあるけど、後はまあ・・・。あ。クーちゃん、その見かけた網持ってた人は白衣の人だけだった？他にはいなかったの？」
「ああ。居なかった。それがどうかしたか？」
「うらなりさんな研究職の人だけが走り回ってるなんておかしいよねー・・・」
「研究職の人間なんて専門以外の常識はないアホばっかだろ。経費削減で警備を削っててもおかしかねえ」
その言葉にリコリスは、顔に苦笑めいたものを浮かべた。うっかり笑いそこなってしまったようなものを。
「・・・なんだ」
「わかってるくせに。クーちゃんが何言ったって、私は首を突っ込むからね」
「お前なあ！」
「ここは王のお膝元。正規の研究なら、万全を期して警備を付けて

るはず。有能かどうかは別にしてね。それがお上の組織だもの。それなのに一人も見かけないなんて、違法研究してました、って言ってるようなものよ」
「・・・決めつけなくても良いだろ」
「大丈夫。クーちゃんが何を言ってもすることは変わらないから」
「それのどこが大丈夫だ！」
「だって、今回はホントにどうしようもないもの。さっき何かの破壊音が聞こえたのよね。扉が砕けたような・・・」
「マジかよ！それを早く言え！超重要だよな！？それ！！！」
「と、いうわけで様子を見てくるから、もしこっちに来たら奥の２人をよろしく」
「・・・めんどくせぇ！」
「お願いね～」
リコリスはいつも通りの何を考えているかわからない、掴みどころの無いのほほんとした笑顔を浮かべ、そう言って走り去ろうとした。

「リコリス」
クラウドはその背中に声を掛ける。
「ん？」

「気をつけろよ」

リコリスはその言葉をかけられると一瞬だけきょとんとして、今度はまるで小さな子どものような、無防備で、とても嬉しそうな笑顔を浮かべて応えた。

「・・・はーい」

1―7

リコリスは1階の正面入り口のホールに続く廊下歩いていた。その足取りはまるで散歩でもしているように軽いものだったが、石造りの建物であるにも関わらず、足音は全く響かない。それどころか、物陰に隠れているわけでもないのによくよく気をつけていないと見失いそうな程気配を殺していた。

（ここまでは異常なし、っと）

その容姿と全く釣り合わない離れ業を行いながら、そう軽く心の中で呟き、入り口のホールの扉の前まで来た。

扉を少しだけ開けて隙間から様子を窺うが壊れた玄関のドアの残骸しか見えず、それを行ったと思われる存在は見えなかった。

（もう出ていったのかな・・・）

そう思い、リコリスがドアを押し開け、玄関ホールに出て行こうとしたが、ふと思い立ち、一歩後退した瞬間。

ドアが横に弾け飛んだ。

ドアはいっそ間抜けにも思えるような間を開けて部屋の壁にぶつかってがらんがらん、と音を響かせた。それをしでかした影はリコリスが視認する間も許さず、再びその凶悪な破壊力を秘めた一撃を浴びせて来た。

リコリスはそれを前方に飛んでかわした。ぼこっ、とリコリスが一瞬前まで居た辺りから、壁が抉れる音がした。ちらりと見ただけ

だが、影は大きく狭い通路におびき寄せれば小回りのきくこちらが有利である。が。

（万が一にでも2人の方に行かせる訳には行かないよね）

さてと、どうしよう？そう思索するリコリスの目の前には熊程の大きさがありそうな黒狼がいた。殺気に満ち満ちた眼は吸い込まれそうな程深い見事な漆黒だった。残念ながら威圧感たっぷりに逆立っているけれども、毛並みも眼と揃いの見事な漆黒で、体格も素晴らしく良くどこかの森の主だろうと思わせる風格があった。その森の主がこんな小汚い飼育小屋に居る今の状況は酷く不自然だった。

黒狼がその疑問に答える訳もなく、次こそリコリスの息を止める為にじりじりと間合いを計りながら詰めてくる。どう考えても、特に得物も持っていない少女が立たされるには絶体絶命過ぎる状況だが、当の本人は全くと言って良いほど恐怖している様子はない。善良な一般市民が見れば、恐怖のあまり立ちつくしているようにも見えるが、黒狼はその様に考えてはいないようで、慎重に間合いを図っている。

リコリスはふと、その立ち姿に違和感を感じたが、その正体を見つける前に黒狼は再び襲いかかって来た。スピード、タイミング共に完璧な攻撃だったが、それが当たる前に目標が消えた。少なくとも黒狼にはそう見えた。

「びっくりしたあ」

しかし、後ろから仕留めるはずの獲物の声が聞こえ、黒狼は驚愕した。その獲物であるリコリスはのんびりとした声で黒狼に話しかけているのかいないのか、ぽつりとそう呟いた。黒狼は自分が認識できないうちに背後に移動した獲物に脅威を感じ、振りかえりざま

に声と匂いを頼りに反射的に追撃した。今度はかみつき、相手が避けて体勢が伸びきったところを前足でとどめをさそうとしたが、リコリスは前足を黒狼のほうに転がってかわし、懐に飛び込んだ。

そして黒狼の死角、体の下に移動、肺のあたりに裏打ちを叩き込んだ！

「・・・がぁあァ！」

自分よりも遥かに小さい娘が放った見た目に釣り合わない強烈な一撃による衝撃で黒狼の巨体がよろけた。

後ずさって必死に体制を立て直そうとする黒狼を見て、そこでようやくリコリスは違和感の正体に気付いた。

リコリスは戦闘の緊張を解き、無造作に黒狼の方に一歩踏み出した。黒狼は次の攻撃を繰り出すが、リコリスはそれをただ首を傾げただけでかわした。それでも、必殺の一撃が今にも触れそうな程近くを掠めてもリコリスはそれ以上は身じろぎもしなかった。反撃もしない。

それを見て、黒狼の動きも戸惑うように止まった。次の行動を起こす前にリコリスは黒狼に話しかけた。

「私は貴方にこれ以上危害を加える積もりはないよ。貴方が私の友達に理不尽に手を出さない限り。貴方がここに用がないなら、森にはここから北に行けば人に会わずに行ける。もしも街の方に行くなら、ここの敷地の外延の壁づたいに行くと、ずっと走って行って最初の門は、詰め所があるけど今の時間帯はまだ無人だからそこから出ると良いよ」

黒狼はしばらくリコリスを品定めするように見つめていた。見つめているというのは黒狼視点の話で傍から見ればいたいけな少女が猛獣に食い殺される一秒前にしか見えない。しかし、少女の眼にはそのような色はなく、緊張感さえしていなかった。友人の前に立っているような気安さでただ黒狼の眼を見つめ返している。

リリリリリリリリリリリリリリ

そして突然その場に鈴のようなガラスを割ったような甲高い音が鳴り響いた。

「ああ、これは警報だよ。いい加減誰かが勘づいたみたいだね。多分正規の警備員とか教師とかがこの辺りに集まってくるよ。急いだ方がいいと思う」

黒狼は何も唸り声さえ立てず、ただ、じりりと少し後退すると、それから一息に跳び退ってあっという間に壊れた玄関から飛び出して行った。

その場に取り残されたリコリスはしばらくそこに立ちつくしていたが、黒狼が跳び出して行った玄関から今度は代わりに真っ白なフクロウが入って来た。

フクロウはすーっと静かに入ってきてリコリスの近くに倒されていた棚の上に止まった。そのフクロウは藍色の眼をリコリスに恨めしそうに向けた。やけに人間臭い仕草をするそのフクロウにリコリスはにっこりと笑いかけながら話しかけた。

「ありがと。警報鳴らしてくれたのクーちゃんでしょ？」

「ああ。ルナをあいつらのところに残して、よくイタズラで鳴らされる装置のところまでわざわざ行ってな！」

リコリスの言葉に、フクロウは『喋って』応えた。その声は先程クラウドと名乗った声だった。

「うん。わざわざありがと」

あからさまに不機嫌なその声にリコリスはいつもの笑顔で応える。その笑顔にいろいろ諦めたクラウドは詰問の矛先を先程の闖入者に変えた。

「で、結局なんだったんだ？あれ」

「どこから見てた？」

「狼がここから逃げていく姿しか見てねえよ」

「そうなんだ。まあ、ちゃんと後で説明するよ。とりあえず・・・コレ、どうしよう？」

そう言って、リコリスが視線で示したのは、黒狼の置き土産。要するに、破壊された扉やら棚やらその他もろもろ。

「・・・どうしようもないだろ」

「だよね～」

そうやって人ごとの様に会話している2人のいる方に向かってどたばた

した複数の足音が近づいてきた。リコリスは何となく、その足音の一つはラグン先生のような気がするな～っと人ごとのように予想していた。

1―8

「つまりね、あの狼は狼じゃなかったのよ」

学生寮の角部屋の一室。消灯時間も過ぎた暗い部屋の中、ぼんやりと光を発する鏡と向き合いリコリスはそう言った。

「あれのどこが狼じゃねえんだよ。どこをどう見たって狼だっただろ。サイズはともかく」

その謎かけのような台詞に応えたのはクラウドだった。

「うん。狼は狼なんだけどね。狼じゃないのよ」

「だから、ちゃんと説明しろよ！」

そのクラウドの叫びに呼応するように、鏡から声が響いた。

『――――――――――！』

リコリスはその2人の声に軽く耳を塞ぎながら言った。

「ああもう。2人とも短気は損気よ～」

「もったいぶるなっつってんだろ！」

「もっと静かにしてよ、ミューが起きちゃう」

クラウドはやけに人間臭い仕草で両翼をくちばしを覆ってぴたりと動きを止めた。鏡の中の影も心持ち気配が控えめになった。

「・・・もったいぶってなんかないけどね。だから、人狼だったのよ」

「へえそうなるほど、狼だけど頭に人がつくのかあ～へ～・・・って、は！？」

「だから静かに、ってば。・・・人狼（ワーウルフ）の人だったのよ。ホントに信

じられないよね。『盟約』破りをこんな王様のお膝元でやるなんて、バレたらどうなるかわかってるのかな」
「んなっ・・・」
『ーーーーーーーーーーーー！』
クラウドと鏡の影は驚愕に言葉を詰まらせた。

「いやまあ、予想してなかったわけではないんだけど、ほんっと呆れるよねえ」
『ーーーーーーーーーーーーーーーーーー』
「うん。だからそっちも気を付けてみて、スゥ。馬鹿のとばっちり食うなんてごめんだもんね」
『ーーーーーーーーーーーーーーーーーー』
「おいおいおい。そんな冷静なんだよ！」
「だってどうしようもないもの。下手に慌てて首突っ込む方が危ないでしょ？さっきは首を突っ込むなって言ってたくせに」
バタバタ翼を動かしながら慌てて言うクラウドに対してリコリスはあくまでものんびりと言葉を返す。

「う・・・」
「ま、でも、今日も楽しかったね。・・・騒動の後にラグン先生に心配されたのは大変だったけど」

リコリスは今までの雰囲気を振り払うようにそう言うと、スゥと呼ばれた影は呆れたような気配を垂れ流してきた。ちなみに、ラグン氏はお前には危機回避能力がないのか飼育区域で大きな物音がしたら大型のモンスターが逃げ出したとか思わないのか確かめに行こうとするなんて馬鹿かお前馬鹿だろ馬鹿なんだなと小一時間程リコリスを罵倒した。決して心配されて大変だったはっはっはという一言で済まされるのよなものではなかった、という事は先程のクラウドの証言で判明している。

『ーーーーーーーーーーーーーー』
「え？普通普通。２日に一回くらい罰掃除させられるもんでしょう」
『ーーーーーーーーーーーーーー』
「おかしいのはそっちよ。・・・ん？罰掃除する奴がどのくらいいるか？私とジャンくらいだね。で、ミューも時々手伝ってくれるの」
『ーーーーーーーーーーーーーー』
「どうしたの？眉間に皺刻んで、老けて見えるよ？」
『ーーーーーーーーーーーーーー』
「はいはい。そんなに怒らないで？」

そうやってしばらく、ぐだぐだとした感じで話していたが、ふと、雲が切れて差し込む月光が作る影がさっきよりかなり長いことに気付いた。
「わ、もうこんなに時間が経ってる」
『ーーーーーーーーーーーーーー』
「うん。じゃあ、また。元気でね。おやすみ」
そう言いと鏡から相手の姿が消えた。そしてリコリスが鏡を撫でると鏡の光も消えた。

そして、彼女はうーん、と伸びをしてイスから立ち上がった。
「さーって、寝よっか」
「おう、さっさと寝ろ」
「おやすみ、クーちゃん、ルナ」

と、言い終わると同時に明かりを落とした。ルナは眠たそうにふらふらとしっぽを揺らして応えると、それをぱったりと下ろした後、人形みたいにぴくりとも動かなくなった。クラウドも止まり木の上で首をすくめて眼を閉じた。それを見て微笑みながら、リコリスもベットに入ってシーツを被る。

「おー。今日も良い夜ね。月が奇麗だわ」
それきりわずかな月明かりが差し込むだけの部屋の中で動くものはなくなり、静かな寝息だけが響いた。

彼女の平凡な一日の終わりを見ていたのは月だけだった。

2―1　彼女による女の子の平均的な買い物

タッタッタッタッタッ。

「何でこうなったか分かるか？リコリス」

リコリスの左肩に止まったクラウドは何かを押し殺したような声で尋ねた。

タッタッタッタッ。

それにリコリスは真剣な面持ちで数秒ほど悩んでから答えを出した。

「あれだ！皆から、たくさん買い出しを頼まれたからだね！」

「違うわ！！！てめえが！！！あのガキどもにかまうからだろうが！！！」

「そんなことないよ。先に向こうからかまって来たんだし」

「一番の問題はその後の対応だ！！！」

「うふふふふっ」

「テメエ、いつも笑えば済むと思ってんじゃねえぞ！！！」

一人と一匹、というか肩にクラウドを乗せながらリコリスは割と馬も真っ青な全力疾走で、路地裏を駆けていた。あのクソガキ共どこに行きやがった！こっちには居ねえ！あっちを探せ！見つけたらぶっ殺してやる！等々のＢＧＭ付きで。

「まあまあ。・・・でも、どうしようかなあ」

彼女は、くいっ、と首を傾げながら呟いた。

――――――――――――――――――――――――

屈強な騎士団を抱え、交易も盛んである大国、ラスティール王国の王都は活気に溢れている。その街の市ともなれば。

「らっしゃいませ！そこの奥さん！うちのリンゴはどうだい？今朝仕入れたばかり！新鮮だよー！」
「そこの若いの、セレス産の装飾品はどうだい？いまならお安くしとくよ！気になる娘への贈り物にピッタリだよ」
「おい、店主もっとまけてくれよ」

出店が所狭しと立ち並び、売り子たちの客引きの為に張り上げられた声が響き渡る通りを、彼女は豊かな栗毛をざっくりとまとめた三つ編みを、軽快に揺らしながら歩いていた。

「さすがは、王の御膝元の街。市場はにぎやかだね～、クーちゃん。ルナ」

周りの活気に感化され、髪と揃いの色の瞳を、丸い大きめの眼鏡の奥で輝かせ、リコリスは小さなお供達に話しかけた。
「バレッタの港には負けるがな。あそこの連中は毎日毎日何が楽しくてあんなにさわげるのか謎だ」
「そうだねえ。あそこの活気はまたレベルが違うよね～。でも、『屋敷』に比べたらどこでも賑やかだよ」
「別に、田舎に行けば、静かなところなんていくらでもあるさ」
『屋敷』という単語に、クーちゃんことクラウドは顔をしかめた。

が、フクロウなので見た目は変わらない。リコリスとルナには気配で分かったが。しかし、彼（仮）はすぐに気を取り直して、少し軌道をずらして会話を続ける。

「ま、この騒がしさの数少ない利点は、人目を気にせず安心して喋れることだな」

この人ごみの中なら、誰が何と話していても気づく人間はいない。気付いたとしても気のせいで済ませられる。

「そだね。寮はミューと相部屋だし、結構壁も薄いし」

魔術の技術水準が高いラスティールの王都では、言葉を解す知能の高い使い魔を連れている魔術師は少なくはないが、クラウド程、言葉を流暢に操れるものは非常に珍しく、リコリスのような落ちこぼれ、もとい、見習い以下といっていい学生が連れていることはまずありえない。よって、非常に悪目立ちする。加えて、クラウドはリコリスの使い魔というわけではなかった。

「さあ！今日はたくさん買い込むよ～！今日は月に一度の市だからね！いつもより珍しいモノ、売ってる店も出るからね！」

「妙なもん買うんじゃねえぞ」

「はいはい。あれ？今日はルナもやる気だね？」

言葉を持たないルナは、しっぽをぶんぶん振り回して、リコリスの発言に対しての返答とした。一行は談笑しながら賑やかな通りに繰り出して行った。

――――――――――――――――――――――――――――

「さてさて、あとは、ジャンに頼まれてたお菓子・・・」

「あいつ、人をパシってまで菓子食うような甘党だったか？」

「なんか誰かに頼まれてたみたいだったけど」

そんな会話を交わしながら、一行は雑踏の中を縫うように歩いていた。

「あ、この通りを右右」
「おい・・・。これ以上荷物増やすのはやめとけ」
「え？心配してくれてありがと。でも大丈夫だよ。かさばってるけど、結構軽いんだよ」
リコリスは自分より頭２つ分は高い、嵩張った荷物を両手いっぱいに抱えながら応える。
「心配してるのはお前の腕力じゃなくて、お前にトロル並の馬鹿力女って二つ名がつくことだけどな・・・。普通の女の子って生き物は、そんなに荷物が持てるようにできてないんだ。そこらへんで力いっぱい規格外アピールするのはやめとけ」
クラウドはリコリスの右手にぶら下がっている陶器の茶器がワンセット入った袋を見つめながら、重ねて言った。

「大丈夫大丈夫。あとこれだけだから」
「だーかーらー！」
クラウドは、いつもの笑顔で自分の忠告を聞き流す気まんまんなリコリスに声を荒げるが、効果は全く無い。
「ここら辺のはずだけど・・・」
「おい！無視すんな！」
「わっ！」
声とともにリコリスは一瞬立ち止まった。
「なんだよ！」
「いや、誰かとぶつかって・・・」
リコリスが荷物を精一杯ずらして前方をみると、子供が走って路地を曲がっていくのが見えた。それを見て、彼女は脇に寄ってよっこらしょと道端で荷物を下ろした。
「どうした？」

「ん～」
クラウドの声に生返事をしながら、リコリスは服のほこりを払う様な仕草をした。そして、一通り払い終わるとあ、やっぱり。と呟いた。

「だから何が？」
そして、彼女はいつものように呟いた。

「財布をスられちゃったみたい」

2―2

その子供は薄暗い裏路地を、迷いなく一目散に駆け抜けていた。怯えで澱んだ眼で、時折後ろを振り返って見ていたが、追手がいないと分かると足を止め、手の中にあるものを検めた。子供の緊張した顔は、じわじわと内から滲んできた喜びによって、薄汚れた裏路地に似合わない晴れやかな笑みに変わっていった。

そして子供は、先ほどとは全く別の感情に衝き動かされて、裏路地を再び駆け抜けていった。

やがて子供は、少し開けた路地にたどり着いた。そこには、数人の子供がいた。年は、駆けこんできたが年長で12，3才、下は5才くらいでバラバラだった。共通して言える事は、幼いから、という理由だけでなく、みんな痩せぎすで男女の区別がつきづらいのと、着ているものが粗末で、服というよりは穴のあいたズタ袋と形容した方が近いような代物だという事だった。

「ジル？どうしたの？　そんなに慌てて」
「ジルにい。だいじょうぶ？こんこんしてるよ？」
「ああ、だい、じょーぶ。聞け！お前ら！」
「ちゃんと聞くから、とりあえず、息ととのえろよ」

ジルと呼ばれた、走って来た子供は、一刻も早く自分が上げた素晴らしい成果を自慢したい一心で一生懸命に息を整えようとしているが、はずむ心ははずんでいる息をなかなか抑えさせなかった。

それでもようやく息を整えると、ジルは誇らしげに言った。

「見ろよ、コレ！ラスティールの金持ちのお嬢様からやったぜ！」
「マジかよ！」
「すげえじゃん！」
「ジルにいすごい！」
「さっすがあ」
「別に、これくらいどうってことねえ。おんしつ育ちのお子さまに俺が捕まえられるわけねーだろ」
とはいいつつも、ジルは照れくさそうに鼻をこすりながら、顔を赤らめていた。

「ねー。『おんしつ』って何～」
けれど、一番体の小さい子が早くも、彼の戦利品から耳慣れない単語に興味を移した。
「それは～あれだ。えーと、それなんだ」
ジルは、さっきの威勢の良い態度から一転、言葉を濁した。
「だから、何～？」
「あーうるさい！！おんしつはおんしつだ！！！」
「温室っていうのはね、ガラス張りの部屋で気温を調節して、植物を本来とは違う時期に育てる為の部屋よ」
「へー、そうなんだ。ありがと、おねえちゃん」
「どういたしまして。ところで、これは返して頂戴ね」
「あれ？」

何かあり得ない声がしたと思ったら、いつの間にかジルの手の中から財布が消えていた。ジルが慌てて後ろを振り返ると、そこにはさっき自分が財布をスった少女がいた。
「な！？撒いたはずなのに…！」
「あの子があなたを追いかけていかけていてくれたのよ」
リコリスが指で指した方には、黒猫がたたずんでいた。こんなト

ロくさい女も撒けなかったのかという事実にしばし呆然といていたが、ああ、なるほどと納得し、・・・そして、我にかえり、叫んだ。

「お前ら逃げろ！・・・ってあれ！？」

「君がリーダーっぽいけどましかしてあんまり人望ない？」

ジルが気付くと、その場にはジルとリコリス一行しか居なかった。

「さあって。どうしようかしら？」

その時、ジルには、その頬笑みが悪魔のそれに見えた。

２―３

　２０年程前まで、ラスティールは隣国と戦が行われていた。しかし今では、市が立っているような大通りは戦の傷跡など、見る影もない。
　けれど、戦によって全てを失い、未だ貧しさから抜け出せない人々も多く存在していた。華やかな大通りの影を全て引き取ったかのように、王都の一部には王の威光が届かない暗がりが、スラムが存在している。

――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

　・・・１時間後、市の通りには荷物を両手いっぱいに抱えている少女と、ふてくされている少年と、フクロウと猫の一行がいた。
「いや～。ホントにあなたがいてくれて良かった～。私１人じゃ持ちきれなくなっちゃったから」
　ガッサガッサと荷物を揺らしながら上機嫌でそう言った。それとは対照的に少年は思いっきり不審の目でリコリスを見ていた。

「・・・何企んでやがる」
　リコリスは鼻歌を中断して荷物に埋もれそうになっている少年、ジルの方を向いた。
「え？別に何も？…うん。あなたにこのまま荷物を寮まで運んで貰おうなんて企んでないよ。うん」
「って、まだオレをこき使う気まんまんじゃねぇか！！！」

「あ！あんなところに屋台が出てる！！！」
「って、そんな事が聞きてェんじゃな・・・ってオイ！！人の話を聞きやがれ！！！」
「ちょっと荷物見てて！」
ジルの渾身の抗議もあっさり聞き流して、リコリスは荷物を置いて屋台に向かって走り去った。

「くそっ。このクソ猫さえいなけりゃ…」
そう忌々しげに吐き捨てたジルの足元には、ルナがその台詞に反応したようなタイミングで、ジルの顔をちらりと見上げて、釘を刺すように尻尾でジルの足をぺしぺしと軽く叩いていた。警邏に突き出されなかったのはジルとっては嬉しい誤算だった。このおじょうさまは頭が軽そうだから隙をみて逃げ出そうと、大人しく荷物持ちをしていたが、この猫には全く隙がない。今のところは自分を荷物持ちにさせて満足しているが、いつ気が変わるかわからない。

「はい」
そう思って、足元に視線を落としてルナを睨みながら、思い切り蹴飛ばしたいという欲求と戦っていた彼は（2，3度リコリスの目を盗んで実行しようとしたが、見事にかわされた）、いきなり目の前に突き出された物が揚げ菓子であるということに気づくのに時間がかかった。

「・・・なんだよ」
「何って、揚げ菓子（チュロス）」
「そんなことぐらいオレにだってわかる！馬鹿にしてんのか！？」
でも、自分では買えない。金があっても、ここのあたりの店はオレのような一目でスラムのガキだと分かるような奴を近づけたりしない。
「ううん。ただ、あなたが何？って聞いてきたから」

そんなジルのいら立ちに全く気付いていないかのようにリコリスはのほほんと言葉を続ける。
「どういうつもりだ！って言ってんだよ！」
「なるほど。これはあなたの分だよ。どうぞ」

「・・・どういうつもりだ」
ジルは揚げ菓子を親の敵とばかりに睨みつけながらもう一度言った。この少女ははさっきから始終この調子だった。頭が痛い。金もちって皆こうなのか？

「だから、何が？」
リコリスはそんなジルに首を傾げながら聞き返した。
「こんなんでオレが言うこと聞くと思ってんのか！！」
「うーん。会話の方向性が見えないんだけど」
「バカかおまえ！？」
「えっと。学校の筆記は平均以上の点は取ってるよ」
その何気ない言葉が、ジルの、本人も見て見ぬふりをしていた膿を抉った。そこで、ジルは色々と限界だった。突き出されないよう大人しくしていなければいけないのに！
「はっ！そうだよなあ、学校に通ってるおじょーサマはそれはそれは、おかしこくていんだろ、オレみたいな、オレみたいなスラムのドブねずみとはアタマのデキがちがうから、オレとまともな話ができねえんだろ！？」
怒りで目の前が赤くなる。さらに視界に映る自分のみすぼらしい靴が、水に落ちた時の様に歪んできた。本当に頭が痛い。こいつのせいで頭が痛いんだ。こいつが訳のわからないことを言うから。心臓を鷲掴みにされたように痛いのも、こいつが馬鹿なせいだ。
「いや、確実にお前の思考回路の方がよっほど常識的でまともに出来てる」
「？なんだ今の声・・・」

「そんなことないよ」

その言葉は、何故か良く響いた。リコリスはジルの詰りにもどこ吹く風で、何故かフクロウの顔を鷲掴みしながら彼を捕まえた時から変わらない顔で笑っていた。

「ただ、荷物持ちして貰ってるんだからこのくらい奢るのは普通でしょ？」

「さっきからなんなんだよ一体！・・・突き出すんならさっさとに突き出せばいいだろ！オレを引きずりまわして楽しいか！？」

食ってかかるジルに、リコリスはやはり自分のペースを崩さなかった。ただ、のんびりと言う。

「突き出すつもりなんてないよ、めんどくさいもの。私に何の得もないし。だから、その代わりに荷物持って着いて来てもらうのは、楽しいっていうよりありがたいよ？さっきも言ったけど、私1人じゃ持ちきれくなっちゃったから」

「・・・」

「冷めちゃうと、おいしさが半減しちゃうから、早く食べてね。あ！両手ふさがってたら食べられないよね。そこらへんに座って休憩がてら落ち着いて食べようか」

下を向いて押し黙ってしまったジルには頓着せず、リコリスはあっちの段差が丁度いいね～、と言いながらそちらの方に歩いて行った。リコリスは今まで会った仲間以外の奴の態度のどれとも似ていない。どう考えても自分を馬鹿にしているようにな言動なのに、馬鹿にしているような感じがしないような気もする。こいつが何を考えているのかジルにはさっぱり分からなかった。何かが胸からせり上がってきた。さっきのように、何とか言ってやりたかったが、何

故か言葉は出てこない。

とりあえず、他にどうしようもない。突き出されないように大人しくしていないといけない、とさっきも考えた事をもう一度心の中で繰り返して、こちらに向かって手招きしているリコリスに大人しく着いて行った。

2－3（後書き）

そろそろ書きだめしていたのが無くなるので、更新速度が落ちます。

2―4

ジルは始めはおそるおそると揚げ菓子を食べていたが、途中から目を輝かせて、飢えた野良犬のようにバクバク食っていた。一方、リコリスはその横でそれなりに行儀よく食べていたが、それなのに同じ時間で何故かジルの倍以上食べていた。しかも最初に店主に頼んでいたらしく、何回もおかわりをしていた。

ひと段落したところで、ジルは改めてリコリスを問い詰めようとしたが、それは視界に入って来たもののせいで吹っ飛んだ。

「げっ！」
「どしたの？」
リコリス首を傾げると彼女の後ろから野太い声が響いた。

「よう！やーっと見つけたぞ！！」
「だめっ！」

声と同時にジルは走りだそうとした。が、それは叶わなかった。いつのまにか一行を囲んでいた男達の間をすり抜けようとしたところを、その中の一人に、もろに蹴飛ばされたからだ。

「大丈夫！？」
リコリスは慌てた声を出してジルに駆け寄った。そんな2人に男の一人が追い払う仕草をしながら言う。

「お嬢ちゃん。オレ達が用があるのはそのガキだけだ。さっさと消えろ」

ドスの効いたその声にも、リコリスは全く怯まなかった。
「それは困ります。この子は今、私の荷物持ちをしてもらってるんです。この子がいないと荷物を持って帰ることができません」
いきなり始まったこの騒動に、周りの人間は遠巻きに気の毒そうにこちらを見ているだけで、助けは期待できそうにもない状況だった。

「へえ？自分の身の安全より、荷物の方が大事なのか？」
リーダーらしき男が、世間知らずのお嬢様だと完全に馬鹿にしきった調子で、そんなリコリスを冷やかす。他の男たちもリコリス達を逃がさないように囲みながらも、ニヤニヤとげひた笑みを浮かべている。
「いいえ？命あっての物種です。もちろん、自分の命の方が大事です。でも、ここで私が荷物を諦める理由がありませんから」

「おい。お前、この状況分かってんのか？」
全く怯えていないリコリスのように痺れを切らした一人が声を荒げる。

「はい。良い大人が寄ってたかって子供をいじめています」
リコリスは大真面目に言いきった。
「・・・」
一同は物凄く反応に困った。ちなみに、クラウドは天を仰いだ。

「なあ、お嬢ちゃん。オレ達はヒガイシャだぜ？こいつはなあ、この間、オレ達から盗みを働いたんだ。その分償ってもらわなきゃなあ」
いち早く立ち直った男が、気を取り直してそう言った。

「あら？そうだったんですか？」
リコリスは間の抜けた声でそう言った。そして、心底気の毒そうに相槌を打つ。「そうですか。それは災難でしたね」
「嬢ちゃんはそいつに騙されてるんだぜ。悪い事はいわねえから、さっさとそいつを・・・」
「でも、この子はちゃんと荷物持ちをしてくれてます」
リコリスはにっこりと笑いながら男の言葉を遮った。そして、続ける。
「償いをさせたいっていうなら何故殴る必要があるんですか？手加減なしで。怪我をしたら、働けなくなります。そしたら、弁償することができません。少し考えれば分かると思うんですけど、」
「そんなことも分からないなら、もっと頭を使わなくていい仕事に転職なさった方がいいと思いますよ？」
ビッキーン、とその場の空気が凍った。ついでに、ブチッと何かが切れる音もした。
「このガキ！！下手に出てりゃいい気になりやがっ、ってえ！！」
そう怒鳴りながら切れた男がリコリスに手をかけようとしたが、そのどちらも謎の飛来物によって中断された。リコリスが振り返ると、そこには、先程ジルと一緒にいた子供の一人がいた。どうやら、その子が石か何かを投げたらしい。
「じるにいにてをだすな！！はげ！！」
「このばっか！！いくらあいつらがバカだからって、あの筋肉ダルマどもにまん前からケンカ売るな！」
今までそこに隠れていたらしく、別の子供が、横道の曲がり角の

影から半身だけ出してそう言って、慌ててその子を乱暴に引っ張って横道に消えた。

「仲間のガキだ！何人かで追いかけて締めあげろっ、ってえ！」
「はっ！ばーかばーか！当たってやんの！」
「的がでかいと当てやすいな！中身がからっぽで無駄にでかくて助かる！」
きゃはは、通りの反対側からも、どこからか現れて来た子供達が男たちに石をぶつける。

「ゴキブリみたいに増えやがって！！お前ら、全員ぶっ殺せ！！」
「みんな、逃げろ！！」
男達の頭と、いつの間にか立ちあがっていたジルが同時にそう叫び。

そして、実に殺伐とした鬼ごっこが始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7814p/

ヒイロノウタ

2011年2月17日22時50分発行